

## 第 65 回 令和 7 年 7 月 16 日 (水)

### 教師として考えたことについて。

私の教員人生もゴールが見えてきました。みなさんの中で教育に携わる方もいるかもしれないので、思うことを書いておきます。

日本の教育制度が完璧であるとは思っていません。不完全だからこそ修正しようと考えますし、それは成長のために必要です。また時代の変化も教育に大きく影響します。

私が教員になったころは生徒数が多く、1 学年 12 クラスで 1 クラス 50 人近くの生徒がいました。全日制だけでなく定時制も生徒があふれ、なかには荒廃している学校もありました。

授業は一斉授業で黒板とチョークによる教師の説明のみで進むことがほとんどです。私語をしないなど、理解よりも規律を求める風潮がありました。授業についていけない生徒は「落ちこぼれ」と呼ばれ、非行に走ることも少なくありませんでした。

私は教員採用試験の面接で「落ちこぼれ」という言葉を日本から無くしたいと述べました。何からの落ちこぼれなのか、社会か、学校か、このような主語のない言葉で生徒を定義したくないと言いました。

最初に着任した学校はその思いを実現する余裕すらない大変な学校でした。この学校では辛いことも苦しいこともたくさんありましたが、結局 9 年間で過ごしました。その当時は必死でしたが振り返ると教師冥利に尽きる時間だったかもしれません。

今の時代も「不登校」や「引きこもり」など、教育を取り巻くネガティブなワードがたくさんあります。次の若い世代の方がこのようなワードに疑問を持って、世界から無くしたいという思いで教育界に飛び込んでくれることを期待しています。

日本の社会は何かの課題に対して一つのワードでまとめ、理解したつもりになります。病気には一つひとつ病名があり、いくつか治療法があります。教育では同じようなケースを同じ名前でまとめ、すべて同じ方法で解決しようとする傾向があります。

学校も当事者も家庭環境もすべて違うのですから、現在の教育課題もまったく同じというものはありません。マニュアル通りにやっておけば解決するほど甘いものではないのです。残念ながら解決したケースほど記録に残らず、記憶にも残りません。結局携わる教員の経験が処方箋になります。過去の膨大な記録から、今起きている教育課題に処方箋を出す仕事があればいいと思います。校長経験者などでつくる学校のお医者さんです。実現できないですかね…。